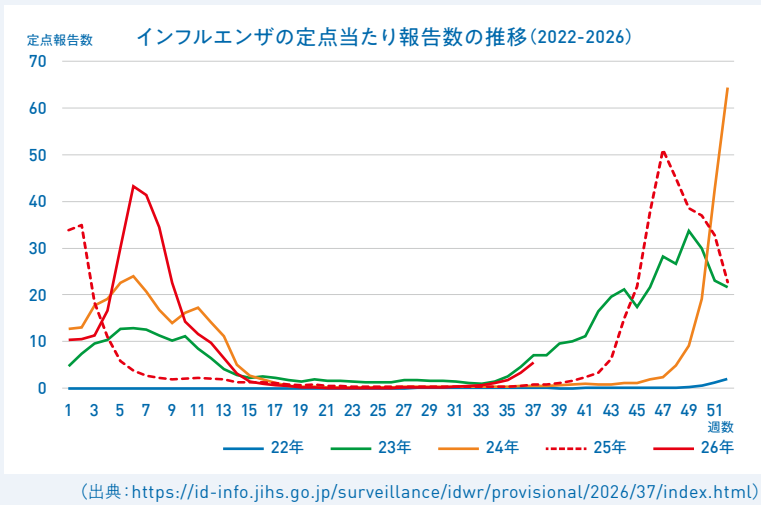


広告

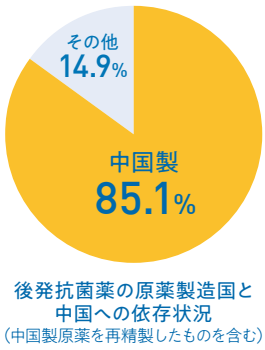
シーズンごとに変わるインフルエンザの流行

インフルエンザは、シーズンごとに流行時期や規模、主流となる型が変化します。変化を捉えるには、患者報告数に加え、病原体を調べ、過去の株と比較することが重要です。リソースバンクは、そのための研究基盤となります。



抗菌薬原薬の中国依存と安定供給の課題

2020年3月の原薬製造国調査では、後発抗菌薬の原薬350件のうち121件(34.6%)が中国で直接製造。韓国などで再精製された中国製原薬を含めると、298件(85.1%)が中国由来でした。一国への依存は、地政学的な影響を受けやすく、安定供給上のリスクとなり、主要な抗菌薬原薬の国産化が求められます。



後発抗菌薬：原薬製造国情報									
抗菌薬の系統	原薬生産国		再精製国		合計				
	中国	その他	中国	その他	中国	その他	中国	その他	合計
β-ラクタム系 抗生物質医薬品	セフェム系	4	46	8	14	0	2	74	
	ペニシリン系	9	1	2	1	4	3	20	
	カルバペネム系	5	4	2	0	0	0	11	
	β-ラクタマーゼ阻害薬	7	4	1	0	0	0	12	
その他の各種系統 抗生物質医薬品	アミノグリコシド系	13	1	0	0	0	2	16	
	マクロライド系等	20	7	16	5	7	3	58	
	テトラサイクリン系等	6	6	0	5	0	14	31	
	他の系の抗生物質	5	2	0	0	1	0	8	
合成抗菌薬	キノロン系	50	21	15	0	3	24	113	
	他の系の合成抗菌薬	2	0	1	0	0	4	7	
国別の原薬製造件数		121	92	45	29	15	52	350	

(ジェネリック製薬協会加盟29社公開情報より／2020年3月現在)

■ 財団プロフィール

公益財団法人ルイ・パストゥール医学研究センターは、ルイ・パストゥールの理念を受け継ぎ、1986年に設立。現在は内閣府所管の公益財団法人としてウイルス性疾患やがん、難病などの予防と治療を目指し、専門領域の枠を越えて、基礎から応用・臨床にわたる研究に取り組んでいる。感染制御の研究や病原体リソースバンクの整備を進めるほか、国内外の研究機関との共同研究を行う。また、講習会の開催、学術刊行物の発行などを通じて、研究活動の支援と知識・技術の普及に取り組み、人々の健康と疾病の予防に貢献することを目指している。



公益財団法人
ルイ・パストゥール医学研究センター
<https://www.louis-pasteur.or.jp>



Louis Pasteur Center for Medical Research

私たちのセンターがその名を冠するルイ・パストゥールは、19世紀に感染と細菌の関係を明らかにし、ワクチン開発などを通じて感染症対策への道を開いた科学者です。その研究を貫いていたのは、目の前の現象を科学の力で解き明かし、得られた知見を人々の暮らしに生かす姿勢でした。

その理念を受け継ぎ、1986年、インターフェロン研究で知られる岸田

パストゥールの
理念を受け継ぐ
40年の歩み

網太郎によって前身の京都パストゥール研究所が設立されました。1996年に現在の名称へ改称し、免疫や感染症の研究を核に、がん、難病、再生医療、老化などへと研究領域を広げられました。基礎研究と臨床研究を結び、国内外の研究機関とも連携しながら、新たな予防法・治療法の創出と実用化を目指しています。私が理事長に就任したのは2015年ですが、専門領域を越えて研究に取り組み、その成果を病気の予防や治療に役立て、社会へ還元するという理念は、設立以来変わっていません。

創立40周年を迎えた今、

これまで培ってきた知見を、次の感染症危機への備えにどう生かすのか。私たちは、感染症研究を支える基盤そのものを日頃から整えておくことが不可欠だと考えています。

コロナ禍で見えた
日本が抱える
感染症対策の課題

新型コロナウイルス感染症の世界的流行は、感染症が人の生命や健康だけでなく、医療や経済、社会活動にも大きな影響を及ぼすことをあらためて私たちに突きつけてま

感染症やがん、難病の予防・治療を目指す公益財団法人ルイ・パストゥール医学研究センター。次の感染症危機に、日本の備えは十分なのか。研究開発の基盤となる病原体リソースの確保・管理と、その拠点となるリソースバンクの整備の意義について吉川敏一理事長が語る。



公益財団法人
ルイ・パストゥール医学研究センター
理事長
吉川 敏一

1973年、京都府立医科大学卒業。同大学教授、学長を歴任し、2015年より現職。抗加齢医学、活性酸素・抗酸化研究の第一人者として、専門領域を越えた幅広い研究に取り組む。医学博士。

感染症に強い日本へ
カギを握る「病原体リソースバンク」



病原体を分離・
確保し、研究に
生かす基盤づくり

そこで当センターが整備を進めているのが、病原体リソースバンクです。

これは、研究開発の土台を整えておく必要があります。ワクチンや抗菌薬、消毒技術の効果を確かめるには、研究対象となる細菌やウイルスを安全に保管・管理し、研究に活用できる状態を保つことが前提です。病原体を研究資源として共有できる仕組みも、感染症への備えの一端を担います。

その一例が、抗菌薬の供給です。日本で使われる抗菌薬は、原薬の有効成分の多くを中国に依存しており、供給が滞れば、国内で必要な薬を確保できなくなるおそれがあります。医薬品を安定して届けるには、製造・供給体制の強化が重要です。また、感染症危機に備えるには、研究開発の土

した。同時に、日本ではワクチンや治療薬の研究開発・製造、原材料の確保、感染制御など、感染症対策の課題も浮き彫りになりました。

その一例が、抗菌薬の供給です。日本で使われる抗菌薬は、原薬の有効成分の多くを中国に依存しており、供給が滞れば、国内で必要な薬を確保できなくなるおそれがあります。医薬品を安定して届けるには、製造・供給体制の強化が重要です。また、感染症危機に備えるには、研究開発の土

病原体を分離・
確保し、研究に
生かす基盤づくり

そこで当センターが整備を進めているのが、病原体リソースバンクです。

これは、研究開発の土台を整えておく必要があります。ワクチンや抗菌薬、消毒技術の効果を確かめるには、研究対象となる細菌やウイルスを安全に保管・管理し、研究に活用できる状態を保つことが前提です。病原体を研究資源として共有できる仕組みも、感染症への備えの一端を担います。

その一例が、抗菌薬の供給です。日本で使われる抗菌薬は、原薬の有効成分の多くを中国に依存しており、供給が滞れば、国内で必要な薬を確保できなくなるおそれがあります。医薬品を安定して届けるには、製造・供給体制の強化が重要です。また、感染症危機に備えるには、研究開発の土

その一例が、抗菌薬の供給です。日本で使われる抗菌薬は、原薬の有効成分の多くを中国に依存しており、供給が滞れば、国内で必要な薬を確保できなくなるおそれがあります。医薬品を安定して届けるには、製造・供給体制の強化が重要です。また、感染症危機に備えるには、研究開発の土

現場で求められる知識と技術の普及にも取り組んでいます。

保存から活用へ
研究資源を生かす
産学官の連携

保存した病原体を研究開発へつなぐことも、リソースバンクの重要な役割です。研究機関や大学、企業が目的に応じて活用できれば、新しいワクチンや治療薬、抗菌薬、感染制御技術の開発を支える土台になります。つの研究機関だけで完結せず、産学官がそれぞれの知見や技術を持ち寄り、研究成果を実用化へとつなげる連携が重要です。感染症は国境を越えて広がる新たな危機がいつ訪れるかを正確に予測することはできません。だからこそ、平時から研究資源や人材、設備を整え、研究開発、医薬品の安定供給、感染制御を一体として進める体制を築く必要があります。

こうした課題を広く共有するため、当センターは11月28日、創立40周年記念シンポジウムを開催します。世界と日本の感染症情勢を踏まえ、病原体リソースバンクの役割や医薬品の安定供給、環境感染制御技術などを取り上げ、専門家と議論します。次のパンデミックに日本はどう備えるべきか。皆さんとともに考え、感染症に強い日本へ向けた一歩に繋がりたいと思います。

公益財団法人ルイ・パストゥール医学研究センター 40周年記念シンポジウム

次のパンデミックに、 日本は備えられるのか？

— 感染症危機に備える研究基盤・医薬品・感染制御の新戦略 —

11/28^土
2026年 13:20開会

場所 ホテル日航プリンス京都 3階
ローズの間
〒600-8096 京都市下京区烏丸高辻東入高橋町630番地
受付時間 13:00～
定員 200名

参加
無料

次のパンデミックに、日本は本当に備えられているでしょうか。

新型コロナウイルス感染症の経験を踏まえ、世界と日本の感染症情勢、病原体リソースバンク、医薬品の安定供給、環境感染制御技術など、感染症危機への備えを多角的に考えます。

産学官の連携により、感染症に強い社会をどのように築くべきか——。

研究者による講演とパネルディスカッションを通じて、日本の感染症対策の未来を展望します。

基調講演



北里大学大村智記念研究所
感染制御学講座 客員教授
八木澤 守正 先生

世界の感染症危機と日本の課題

テーマ講演



公益財団法人
ルイ・パストゥール
医学研究センター 副センター長
高木 弘隆 先生

病原体リソースバンクが
支える感染症研究と
制御技術開発



一般財団法人
機能水研究振興財団
理事長
堀田 国元 先生

日本独自の
備えによる感染制御



公益財団法人
ルイ・パストゥール
医学研究センター 特任主席研究員
菊地 憲次 先生

高純度次亜塩素酸水の
科学的検証と
感染制御研究

進 行



フリーアナウンサー
八木 早希 氏

社会提言セッション

吉川 敏一 理事長

モデレーター

八木澤 守正 先生／高木 弘隆 先生／堀田 国元 先生／菊地 憲次 先生

パネリスト

八木澤 守正 先生／高木 弘隆 先生／堀田 国元 先生／菊地 憲次 先生

申し込み方法 インターネットまたはお電話からお申し込みください。

インターネット

下記URLまたは二次元コードから応募フォームにアクセスし、必要事項をご入力の上、お申し込みください。
<https://forms.cloud.microsoft/R/4Kx7Mpm9kZ>

お電話

シンポジウム事務局
tel.075-712-6009
受付時間／10:00～16:00(土・日・祝除く)

申し込み
締め切り

11/13[金]
インターネットは23:59まで

【お申し込みについて】※2名でお申し込みの場合は、お二人分の氏名・年齢・性別をご入力ください。※お申し込みは、同行者として登録される場合も含め、お一人につき1回までとします。※お申し込み多数の場合は抽選となります。お申し込みの締切日は、参加は確定していません。【当日のご案内について】※当選者には、当選メールを11月20日までにお送りします。当日は受付で当選メールをご提示ください。※お預かりした個人情報、当選メールの送信など、本イベントに関する連絡にのみ使用します。

